

自立のとき

札幌医科大学医師会

うらさわ しょうぞう
浦澤 正三

以前本誌に幼時から小学校時代に至る自身の思い出について記したことがある（「オーちゃん」第1224号、「オーちゃんと遊び」第1249号）。その後の成人に至る期間のことは、現在他誌に執筆中である（「正ちゃん」、さいはてのふだん記）。精神医学を特に勉強したことはないが、自分なりにこの間の精神的・心理的体験の記憶を整理してみたい。

4～6歳の幼・小児期は、覇気のない暗い感じの子供だったと思う。当時の淋しい憂鬱な気分をうっすらと記憶している。夜、橋の欄干から川面を眺める自分、時にそれを自分が上から見下ろしている不思議な光景を何度も夢に見たように思う。

近所の子供とは遊ばず、2階の1部屋に引き籠もり、玩具の自動車を畳縁に沿ってグルグル動かすなど1人遊びをするか、台所仕事をする母について廻り観察していた。時に外に出ても、間口の広がった家の前を往復したり、円周状にぐるぐる廻り目を回して入口のガラス戸に倒れこんだりした。母の行動は所々明瞭に記憶しているが、自分の行動は概してぼんやりと霧に包まれている。後に記す「物事への拘り」は既にこの頃から始まっていたと思う。自分（「僕」）という言葉と言えないため（「オーちゃん」に記した）、自分の存在を主張できずに苦しかった。母親にはよく泣き虫と言われた。直面する事態にうまく対処できず困ってメソメソ泣いていたのだろう。母は「この子は感受性が強いから余計なことは言わないほうがよい」と姉たちに言っていた。

小学校の集団生活には適応できず、挫折し思い悩むことが多く、劣等感の塊であった。自分自身持て余していたのが「物事への強い拘り」である。夜は戸締りの施錠、芯張り棒を繰り返し確認した。目に触れる物は真っ直ぐか直角でなければならず、曆を垂直に直し、鉛筆の字は気に入らないと何度も書き直した。通学途中での「真っ直ぐ歩け、左右の敷石の境目は踏むな」「曲がるときは直角に曲がれ」「左廻りしかしてはいけない」などの突然の天の声に混乱し足取りがおかしくなった。いずれも自分の意志でやっていることだが苦痛で、その場から消えてしまいたいと思ったことも何度かある。小学校の高学年になると、会話の中で次第に「僕」や時には「俺」を意識的に言えるようになる。幼時の引き籠りが原因で遊びによる平衡感覚の発達が遅れたのか、身体のバランス取りと加速度に弱く、スキー、ブランコ漕ぎ、ドッジボールなどは苦手だった。

中学生時代には自己主張もするようになり、読書、

映画鑑賞が趣味、黙々と胸筋、腹筋、下肢筋鍛錬の運動に励んだ。物事への強い拘りが薄らいでくると、関心事は次第に「自分自身」あるいは「自分の生き方」に移っていったように思う。宮沢賢治に傾倒し、「雨ニモマケズ」の詩に歌われた「サウイフモノニワタシモナリタイ」と、目立たず埋もれて生きる生き方が理想となった。

高校時代には、己の存在との関係で、「宇宙は無限か有限か。有限ならばその外側は？」などが大問題となった。当時医学生の子・喜一は「天空に向って行った光は又この場に戻ってくるという説もある」などと当時の新知識を話してくれたが、納得できなかった。登下校の際に、「宇宙のことが分かっていないなら、人間が予想しないことが何時何時起こるかもしれない。大人は何も考えていないからあんなに太っていられるのだろう。醜い大人にはなりたくない」と思った。また、他者との関係については「全てのものはどこかで繋がっていて、自分の言動は他人に何らかの影響を与える」と自分が他人に影響を与えることを恐れた。

色神異常で入学可能か分からなかったが、兄の賛成も得て医学部を目指し、北大教養に進んだ。1年目は、医学部に必要と兄に勧められた第2外国語のドイツ語に力を入れた以外は、進学に必要な最低限度の科目を受講して気軽に過ごした。2年目はドイツ語に集中した以外は、医学部受験に備え教養入学時の受験勉強のお復いをした。教養の2年間は楽しくかつ慌しく過ぎた。

20歳、札幌医大に入学し将来の進路が決まった。自立のときである。もはや他人は当てにできないと覚悟した。医学教育過程を終えて更に齢を重ね、幼時に室に落ちたことが原因とばかり考えていた自らの様々な障害は生来のものと理解するに至った。

上述の経緯を現在の自分の知識でまとめてみると、川面を眺める自分を俯瞰するとは「離人症」的体験といえるだろうか。引き籠もり、親の後追い、種々の反復行動は、「自閉症候群」の範疇かと思われる。「ねばならない」オーちゃんは、強迫神経症による強迫観念・強迫行為ということだろう。スキー、ブランコが乗りこなせず、加速度が嫌なオーちゃんは自閉症候群に伴う平衡感覚を保ちにくい発達性協調運動症であったかと思われる。自己存在への不安、大人への嫌悪感を懐いた中学校～高校時代は、「心理社会的モラトリアム」（エリクソン）の時代であった。

猶予期間を経て成人、自立した以上、この後の物語は、「オーちゃん」（幼時～小学校）、「正ちゃん」（モラトリアム時代）ではなく、自己同一性を確立した「私」を主語に語らねばならない。一方では、幼時の拘りや几帳面さは程度の差こそあれ現在の私に引き継がれており、今や必要不可欠な個性の一部となっている。